

No	感染症(PT)	出典	概要
55	鳥インフルエンザ	asahi.com 2008年1月10日	中国衛生省は2008年1月10日、中国南京市で鳥インフルエンザ(H5N1型)に感染して死亡したの息子から、父親への感染を確認したと発表した。中国で人から人への感染が確認されたのは初めてである。ウイルスが新型に変異すると大流行する恐れがあるが、遺伝子の変異はないとしている。
56	鳥インフルエンザ	CDC Emerg Infect Dis 13(9) 2007年9月	インドネシア北スマトラおよびトルコ東部の家族群で観察された高病原性トリインフルエンザAサブタイプH5N1感染が、ヒト-ヒト伝播によるものであるかを調べるため統計的方法を用いた。感染の2次的発病率(SAR)および局所的な基本再生産数(R0)を見積もった。スマトラの例についてはヒト-ヒト伝播の統計的エビデンスが得られたが($p=0.009$)、トルコについては統計的エビデンスは得られなかった($p=0.114$)。
57	鳥インフルエンザ	China View, www.chinaview.cn 2008-01-10	2007年12月に江蘇省南京で発生した52歳男性の鳥インフルエンザ感染患者は、患者であった息子との濃厚な接触により感染したものであり、ウイルスの変異は認められていない。しかし、息子と父親はいずれも死亡した家禽との接触がないため、息子の感染源は明らかになっていない。息子は11月24日に発症し、12月2日に死亡し、父親は12月3日に発症したが回復した。ヒト用トリインフルエンザワクチンは臨床試験Phase IIの段階にある。
58	鳥インフルエンザ	Curr Opin Infect Dis 2006; 19: 401-407	中国ではヒトと食用動物とが密接に接触するため、多数の微生物が動物からヒトへ伝播する。重症急性呼吸器症候群(SARS)とトリインフルエンザは動物を起源とするウイルス感染で呼吸経路で伝播する。これらの発生、増幅、拡大における中国生鮮市場の役割について総括した。中国生鮮市場では食用動物や野生動物が生きたまま売られているため、遺伝子の再配列、組換え、突然変異のような種々のメカニズムにより、ウイルスは新しい遺伝子を獲得したり、存在する遺伝子が修飾される。
59	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1081-1083	高病原性鳥インフルエンザウイルス(H5N1)を含むインフルエンザウイルスが、血液安全性の脅威となるおそれがある。ミニブル核酸増幅法を用いて10,272例の血液ドナー検体を分析した。この検査法の測定感度は、一般的インフルエンザウイルス用プライマーについては804 geq/ml、インフルエンザ(H5N1)サブタイプ特異的プライマーでは444 geq/mlであった。インフルエンザウイルスに対して、このようなスクリーニング検査が可能であることが示された。
60	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1219-1221	イヌにおけるトリインフルエンザ(H5N1)の感染性を調べた。ビーグル犬3匹の鼻腔内と気管内に同ウイルスを接種したところ、病気の兆候は示さなかったが、1匹で接種後1-4日目の鼻スワブからPCRによりウイルスが検出された。全てのイヌで14日目の血清からH5N1に対する抗体が検出された。結合試験の結果、同ウイルスはイヌの上部および下部気道組織に接着することが明らかとなった。イヌは臨床症状は示さないが同ウイルスに感染し、ウイルスを拡散させる可能性がある。
61	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 130-132	カンボジアの田舎の村民における家禽取り扱いに関する知識、態度および実践を調査した。Prey VengおよびKampong Cham地方のH5N1高危険性コミュニティにある25村各々から15歳以上の20人、計500人を目標に、2段階の世帯ベースのクラスター調査を行った。トリインフルエンザおよび個人的防護手段に関して広い知識があるにもかかわらず、大部分の田舎のカンボジア人は危険性の高い家禽の取り扱い方をしていることが示された。
62	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1348-1353	2006年5月にインドネシアのスマトラ北部および2005年12月にトルコ東部の家族で観察されたトリインフルエンザH5N1の集団が、ヒト-ヒト伝播によるか否かを統計的方法を用いて調べた。スマトラの例ではヒト-ヒト伝播の統計学的エビデンスが見られ、概算された2次感染率は29%、局所的増殖数の下限値は1.14であった。トルコの例ではヒト-ヒト伝播のエビデンスは得られなかった。
63	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1601-1603	2006年にイスラエルの多数の養鶏場で発生した高病原性インフルエンザ(H5N1)のアウトブレイクについて疫学的研究を行い、その時の対策をまとめた。同ウイルスは最近インドネシアで分離されたインフルエンザH5N1ウイルスとは分子的特徴が異なった。イスラエルでのアウトブレイクは9施設中6施設が七面鳥農場であった。迅速な対応により、アウトブレイクは17日間で治まり、2007年8月まで再発していない。
64	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2007; 13: 1720-1724	3種類の野生の陸鳥のインフルエンザA(H5N1)に対する感受性と伝播性について調べた。スズメは最も感受性が高く、66-100%が4-7日以内に死亡した。ムクドリは高レベルのウイルスが検出されたが、死亡例はなかった。ハトが最も感受性が低かった。接触した鳥への伝播はほとんど起こらなかった。最近のインフルエンザウイルスH5N1ウイルスの一部の陸鳥に対し、病原性はあるが、同種間での伝播率は非常に低い。
65	鳥インフルエンザ	Emerg Infect Dis 2008; 14: 149-151	農場で生まれた合鴨とガチョウを実験施設で育て、2種類の異なる遺伝子型のトリインフルエンザH5N1ウイルス(A/chicken/Yamaguchi/7/2004およびA/chicken/Miyazaki/K11/2007)を鼻腔内に接種し感染性を調べた。ガチョウ1羽で角膜混濁が見られた以外は臨床症状は見られなかったが、皮膚からはウイルスが分離され、羽毛表皮細胞からはウイルス抗原が検出され、ビリオンが観察された。両ウイルスは家禽のアヒルとガチョウの羽毛表皮細胞で複製され、羽毛が感染源となる可能性が示唆された。